

「真理はイエスにある」

エペソ人への手紙4：21

May.5.2024

エペソ人への手紙4：21（パウロ）

Preface

使徒パウロは、このエペソ書4：21で、「本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストについて教えられているとすれば」と言いながら、「これまであなたが聞き、教えられ、知っているとは自覚しているキリストは、果たして聖書の語るキリストでしょうか？ それとも、あなたがこうあって欲しいと願っているあなたの中で作り上げた独自のキリストでしょうか？」と、暗に問うているような気が致します。

「もしあなた独自の思い描くキリストだとすれば、異邦人、つまりキリスト者ではない人々と変わらないむなしい心で、知性において暗くなり、頑な心とともに、無感覚であることにも気付かずに好色に身を任せたようなご利益期待型の信仰、また生き方になってしまう恐れがあるので、キリストがどういうお方であるのかをしっかりと知る必要があります」と、鋭い霊的危機感を持って使徒パウロ先生は説き勧めておられます。

では果たして、私たちが聞き、教えられ、知っているキリストとは、どうい
うお方でしょうか？

皆さんにとって、イエス・キリストは、どういう存在でしょうか？

Part One

今日の週報に挟まれている月報めぐみ5月号の巻頭言にも書きましたが、私自身にとってのキリストは、「Christ in me」という賛美の歌詞に表現されているように思います。

28年前アメリカにいた時、大学生のためのバイブルスタディーで歌った賛美曲です。

スクリーンに歌詞が出ますので、ご覧になってみて下さい。

上手ではありませんが、一度私に歌わせて下さい。

(パウロ)

Christ in me is to live To die is to gain Christ in me is to live To die is to gain He's my King, He's my song He's my life and He's my joy He's my strength, He's my sword He's my peace, He's my Lord

大切なものを与えるために死なれたイエス様が、生きて私のうちにいて下さる。

大切なものを与えるために死なれたイエス様が、生きて私のうちにいて下さる。

る。

イエスこそ私の王。イエスこそ私の歌。イエスこそ私のいのち。イエスこそ私の喜び。イエスこそ私の力。イエスこそ私の剣。イエスこそ私の平和。イエスこそ私の主。(私訳)

至って聖書的な歌詞だと思います。

そして、この歌詞にある内容が、私にとってのイエス様だと思います。

永遠のいのち、神の子としての身分、神の国の相続、罪の赦し、神を知るといふ知性などの大切なものを与えて下さるために死なれ、そして今は、天の御国の父なる神の右の座に座しておられると同時に、私の内に住んでいて下さる方であり、私の王であられ、私の歌であられ、私のいのちであられ、喜びであられ、力であられ、剣でもあられ、平和であられ、主であられます。

イエス様が私の王であられるので、私にその方が「死ね」と言えば死にたいと思いますし、「生きろ」と言えば生きます。

「戦え」と言えば戦いますし、「勝て」と言われれば勝つための努力をしたいと思います。

「負けろ」と言われれば、負けます。

「進め」と言われれば、進みますし、「諦めなさい、捨てなさい、手放しなさい」と言われれば、諦め、捨て、手放したいと思っております。

また、イエス様は私の歌であられるので、私にとっての最高の音楽は、イエス様を賛美することであり、イエス様を賛美している人の姿を見、イエス様を奏でる音を聞くことです。

ジャンルは問いません。

ロック、ポップ、ラップ、ヒップホップ、クラシック、ヒュージョン、民族音楽、ピアノ、バイオリン、エレキギター、ドラム、ジャンベ、イエス様を賛美する楽器・音楽ならば、そのすべてに心が躍ります。

私がフラワー神学校で学んでいた時に通っていたカリフォルニア州パサデナ市の Lake Avenue Church には、イエス様を賛美する素晴らしい教会音楽がありました。

この教会には、主にクラシックでイエス様を賛美することを指導する音楽主事と、軽音楽でイエス様を賛美する音楽主事がおられました。

また2000人入る大きな礼拝堂の際立つ特徴は、講壇の後ろ側いっぱい設置された物凄く大きなパイプオルガンなのですが、年に何度も、そのパイプオルガンの荘厳な音と聖歌隊とオーケストラと、軽音楽のエレキギター、エレキベース、ドラム、コーラスボーカルなどの軽音楽の楽器や歌手と一緒に、礼拝に出席している会衆の方たちとともに、音楽のジャンルを超え、すべての楽器を用いてイエス様を褒めたたえる賛美が素晴らしく、心震えるような感動がありました。

こんな規模の大きな賛美だけでなく、車を運転しながら、散歩をしながら、

仕事部屋で仕事をしながら、一人で口ずさむ賛美にも心が躍ります。

めぐみ教会で歌われる賛美も、心に染み入ります。

イエス様が歌であられることを知らなかった者から、イエス様を賛美することに、霊魂が喜ぶ者に生まれ変わらせて頂いたことが感謝で仕方ありません。

イエス様は、私の歌でもあります。

イエス様はいのちでもあられますから、イエス様なしに、死に対する恐れが無くなることはありません。

イエス様のことを覚えるならば、死は恐れに値しないどころか、むしろ喜びにさえなります。

イエス様が私のいのちであられるので、死の先を覚え、死の先を想像し、死の先にこそ本当のいのちを見ることが出来ます。

死はもうこれ以上、悲しみや終わりを意味するものではなく、天の御国へ、新天新地への凱旋の意味合いの方が遥かに強くなりました。

アメリカのとある教会では、信徒の葬儀でタキシードを着て、「おめでとうございます」と、召された方の死を互いに祝うそうです。

この地上でのいのちももちろん大切にしたいと思いますが、それよりも次のいのちに繋がる生き方をしなくてはと思えるようになりました。

信仰生活を重ねるとともに、時々、この世に対する未練のようなものが、自分の内で薄れていることに気付くことがあります。

使徒パウロが告白する、「私はキリストとともに十字架につけられ、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」という言葉が、私自身の言葉でもあれることを願って止みません。

そして、イエス様は私の喜びです。

イエス様が私の喜びであるがために、苦しい時も、痛い時も、訳が分からない困難に陥っている時も、足りない時も、迷い悩んでいる時も、神さまに叫ぶことが出来ます。

呻きのような祈りをする事が出来ます。

そして、その苦難の中に、どんな喜びを隠しておられるのかということ、暗闇の中のほんの小さな一点の光を見出そうとするかのように期待することが出来るようになりました。

苦難の意味を期待することが出来るようになりました。

なぜならば、イエス様が私の喜びだからです。

十字架上のイエス様が、それでも父なる神を見上げなされたように、主イエス様を見上げたいと思えるようになりました。

イエス様は私の力です。

かつての私にとっての力は、筋肉でした。

そして、学歴や経歴や知識が力だと思っていました。

しかし今は、「心の貧しい者は幸いです、悲しむ者は幸いです、わたしのた

めに迫害されている者は幸いです」、「先になりたい者は皆の後になり、皆に仕える者になりなさい」というイエス様の言葉に生きられることこそ、力だと思えますし、「私自身については、弱さ以外は誇りません。キリストのゆえに、私が弱い時にこそ、私は強いからです。私は罪人のかしらです。月足らずで生まれたような小さい者です」という使徒パウロ先生の告白が、自分の告白となって生きられることが、力だと思えます。

見た目のカッコよさや体の大きさや所有や経験が力ではなく、キリストにあって貧しく、悲しく、迫害され、高慢で、弱い罪人であることをいつでも認められることが、力であることを知りました。

さらに、イエス様は私の剣でもあります。

私は小学生の頃から剣道をやり、また大学生の頃はアメリカンフットボールを少しかじりました。

格闘技やコンタクトスポーツに、幼い頃から憧れがありました。

なぜなら、自らのからだ自体を剣のような武器にすることが出来、いざという時誰かとの戦いに勝つことが出来ると、そしてその勝利にカッコよさや強さを覚えたからです。

酔拳や蛇拳をするジャッキー・チェンに憧れていました。

でも本当の勝利は、肉体的な、物理的な、社会的な、経済的な勝利ではなく、主イエス様のことを証したために人々から石を投げつけられ、「主イエスよ、私の霊をお受けください。主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と祈りながら殉教していったステパノのような赦す心を持った霊的勝利がまことの勝利であると、バプテスマのヨハネが権力者の間違いを聖書の言葉に従って指摘したことによって首を切られ死んでいった生き様が、神から見た本当の勝利であると、イエス・キリストを語ることの出来る福音の剣が備えられていることが強さであることを知りました。

私の神学校の尊敬する指導教官の先生は、身長155cm、体重50kgないぐらいの小さな体でしたが、その方にはイエスという剣があり、そのイエス様の下さった御言葉を日々研ぎ澄ませながら、剣を磨いておられたことが印象深く残っております。

今でもその先生の生き方を思い出すと、その先生のような生き方が出来ないことに申し訳なさが募り、腰を折って深々と頭を下げたくなります。

その先生の小さな体に、イエス様が剣であられる強さを見ました。

そして、イエス様は平和であります。

インドのマハトマ・ガンジーが有名な言葉を残しました。

「私は、イエス様を尊敬している。しかし、クリスチャンのことは尊敬していない。なぜならば、彼らはイエス様に似ていないからだ。」

耳の痛い言葉です。

ガンジーは、どういう面でクリスチャンはイエス様に似ていないと言ったのでしょうか？

平和をつくるという面においてです。

主イエス様は、人を負かし、勝とうとは思われませんでした。

主イエス様は、むやみやたらと、人を責め立てるような事や陰口をたたくようなことはなさいませんでした。

主イエス様は、小さな子供を自分の感情や調子に従って、叱ったり、叩いたりしませんでした。

主イエス様は、闇雲に、私たち罪人を締め上げ苦しめるようなことはなさいませんでした。

主イエス様は、ご自分を攻撃してきた人に対して、武器を持って相対するようなことはなさらず、「剣を取るものはみな剣で滅びます」と警告されました。

主イエス様は、ご自分に無実の罪を着せ、鞭で叩き、唾をかけ、拳で殴り、誹謗中傷を浴びせながら十字架に架けた者たちを呪い、復讐し、借りを返す代わりに、その人たちのことを尊く思い、いのちに代えるほどにご自分よりも優れた者と思って下さりながら、むしろ彼らのために、「父なる神よ、彼らをお許し下さい。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」と、赦し、愛し、祈りながら死なれました。

そして、何者をも、何をもってしても壊すことの出来ない平和を示し、平和をお造り下さいました。

主イエス無しの平和は、いつかは壊れる張りぼてのような平和であり、羊の皮をかぶった狼のようであります。

膨大な武器を隠し持っている現代の国家のような見せかけの平和です。

だから聖書の中で、父なる神さまは、御子なるイエス様は口酸っぱく、「神を恐れ、神の言葉を悟ることを求め続けるならば、あなたがたは平和を平安を生きることが出来る」とお語りになります。

主イエス無しに永遠へと続く平和は語れないですし、語ったところで、いつの日かその上っ面の平和は、古ぼけた色あせた姿を露わにすることでしょう。

クリスチャンは、このイエス様が平和であることを知り、その平和を造り上げようと、イエス様に倣おうと努める者たちであるはずで

そして最後に、主イエス様は、主です。

主の主です。王の王です。まことの神です。

コロサイ人への手紙 1 : 15 - 17 (パウロ)

コロサイ人への手紙 2 : 3、9 - 10 (パウロ)

主イエス様こそ、すべての支配と権威のかしらなるお方です。

万物の創造者であります。

知恵と知識というすべての宝がこの方のうちに隠されています。

そして、これは宗教的な教えではなく、歴史的事実として時に刻まれ、物事に刻まれ、森羅万象に刻まれ、その事実を前にして、「あなたはどうか生きるのか」と問われます。

聖書に書かれているすべての言葉は思想でもなければ、哲学でもなく、誰かが編み出した宗教的な教えや情報でもなく、事実です。

歴史的事実を記録し、その事実を前にして、「あなたはどう生きるのか」と問います。

「あなたは、あなた自身をあなた自身の神として主人として生きるのか、それとも、主の主、王の王であられるイエス・キリストがあなたの神であることを知り、その方を主として生きるのか」と問います。

主なるイエス様の僕である者たちは、持っていなくてもすべてを持っており、1時間後に何が起こるかは分からなくてもすべてを約束され、僕であるがためにすべてに従い、従えることに喜びと光栄を覚えます。

Part Two

主イエス様は、私たちに大切なものを与えるために死なれ、生きて私たちの内にいて下さる私たちの王、歌、いのち、喜び、力、剣、平和、主なるお方です。

正にイエス様というお方は、信じる者にとって人生そのものであり、生きる理由そのものであり、私という存在の確証そのものであります。

言葉を変えますと、現実です。リアルです。真実です。生々しきです。

エペソ書4：21で使徒パウロは、イエス様のことを、

エペソ人への手紙4：21（パウロ）

真理はイエスにあるのですから。

と言います。

「真理はイエスにあるのですから。」

真理という言葉のギリシャ語 ἀλήθεια アレセイアは、真実、事実、現実、リアルとも訳せる言葉です。

即ち、「現実はイエスにあるのですから」、「事実はイエスにあるのですから」、「真実はイエスにあるのですから」、「リアルはイエスにあるのですから」と訳すことができます。

イエス様は、ヨハネの福音書14：6でこう言われました。

ヨハネの福音書14：6（パウロ）

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」

ここでの真理という言葉も、ἀλήθεια アレセイアという言葉です。

つまり、「わたしが現実です。わたしが事実です。わたしがリアルです。わたしが真実です」ということです。

ということは、主イエスを知らずに信じずに生きることは、現実を生きることにならないということです。

「宗教は現実逃避だ」なんて言われたりすることがありますが、イエス・キリストを知ること信じることは、宗教ではないということです。

なぜならば、イエス様が現実だからです。

ゆえに、人の作る宗教、または無宗教や無神論と名乗る信条のようなものは、まことの福音の、または唯一まことの神を信じることの模倣であり、人の欲望や願望の世界を胸に抱くために作った非現実的逃避ということになります。

主イエスを知り信じることは、そんな空虚な非現実世界から実りある現実世界へと引き出される、救出されるということです。

旧約聖書の出エジプト記には、イスラエルの民たちをエジプトの奴隷の身分から神が救い出す贖い出すという事件が記録されていますが、その事件・出来事が私たちに教えてくれる大切なメッセージのうちの一つが、非現実世界から現実世界へと引き出される、救出されるということです。

人の作りだした目に映る煌びやかで豪華絢爛な現実を装った神無しの非現実世界から、人の作りだした目に映る煌びやかで豪華絢爛なモノなど何一つない神がお造りになった大自然・荒野という神有りの現実世界に移された、引き出された、助け出された、救出して頂いた、神無しのファンタジーの世界から、神がおられるリアルな世界へと救い出して頂いたということです。

ですが、せっかく現実世界へと引き出して頂いたのに、民たちは、「あの目に映る煌びやかで豪華絢爛なエジプトという非現実世界に戻りたい。本当の神がいようがいまいが、あの非現実世界に身を置いた方が夢見心地でいられるし、あそこでは生きていくための仕事が人生のすべてであった奴隷ではあったものの、美味しい食べ物があったし、着るものもあったし、寝床があった。あの塀に囲われた世界に戻りたい」と訴えます。

ある意味中毒ですね。

非現実世界に生きることの中毒になっているので、その非現実世界が現実であり、その神無しの世界が全てであるかのように体の隅々まで染められてしまっていた。

せっかくその中から引き出して頂いたのに、その空虚な快樂がこの上ない快樂のように未だに感じられ、または、何の目的もなく漂っているかのようなその生活がむしろ楽に感じ、中身がありそうで無いようなモワッとした不透明さが心地よい、その世界にいつのまにか飼いならされていたようではあっても、その魂の自由を感じない飼いならされた生活が懐かしく思えてしまう。

「やっぱりまだ、あの世界には何かがあるかもしれないし、心地よかった！」と思えてしまう。

使徒パウロも嘆いた私たちの内に住んでいる罪が、ざわつくのです。

「死ぬまでに見るべき映画50選」と言われる映画のうちの一つに、「ショーシャンクの空」という映画があります。ご覧になった方もおられるでしょう。

あの映画の原題英語のタイトルは、「ショーシャンクの贖い」と言いまして、実はキリスト教的世界観を描いた映画なんです。

この映画の中に、一人の模範囚が登場してくるのですが、とても誠実な人で長年の服役生活を終えて、遂に塙の外の自由な世界へと出所して出てきます。

ところが、その与えられたせつかくの自由な世界に、心も体もついて行けず、トイレ一つ行くのにもいちいち許可を取っていた生活が身に染みついている、塙の外の自由な世界に馴染めなくなり、遂には、長年過ごした塙の中・刑務所生活が恋しくなってしまう。

かと言って、再び刑務所に戻るために罪を犯す訳にはいかず、結局、せつかく自由の身となったのに、その自由を謳歌することが出来ずに、自ら命を断ってしまう。

皮肉なことに、与えられた自由を謳歌することが出来ないほどに、不自由な世界に身も心も染まってしまっていて、むしろ、不自由な世界への憧れさえ頂いてしまい、結局、不自由に自由を浸透されてしまう、自由に慣れていない私たち人間の何とも表現し難い哀愁をこの登場人物に見ます。

この映画がキリスト教の世界観を描いているということを考えますと、イエス様を信じてせつかく自由を与えられたのに、その自由を謳歌出来ない世のことに縛られたがる罪なる性、世のものを欲し満たされようとする罪なる性質、世の中の物事で真理なるイエス様を神さまを量り試そうとする気質、そして遂には、神様をイエス様を見失ってしまう傾向が私たちにはあるということを教えられる気が致します。

使徒パウロは今、エペソ書をもって私たちに、「せつかくあなたがたは、天上にあるすべての霊的祝福をもって祝福され、天地万物の創造の前からキリストにあつて選ばれ、聖なる傷のない者にしようと愛をもって救い出され、神の豊かな恵みによって御国を受け継ぐ神の子の身分を回復した現実世界に戻され、その現実世界を生きるよう導かれているのに、なぜなおも未だに、不義や悪や淫行や貪欲、妬みや殺意や争いや悪巧みや陰口、人を中傷し、裁き、侮り、高ぶり、神を憎み、親に逆らい、浅はかで、情け知らずで、無慈悲なこの世という非現実世界に対する憧れを捨てることが出来ずに、その価値観に惹かれながら生きているのですか？

むなしい心で、知性において暗くなり、神のいのちから遠く離れているような生き方から、神とともに生きる、神の言葉に生きる、神の言葉を信じ、主イエスとともに霊的現実世界を生きようではありませんか」と、厳かに勧めます。

Part Four

40日40夜、荒野で聖霊に導かれ断食をし、身体的に疲弊しておられたイエス様にサタンが現れて誘惑した言葉や物事のすべてが、目には見えないけれ

ども現実である神の国のことではなく、目には見えるけれどもまやかしのよう
な何かが有りそうで何も無い豪華絢爛なこの世という非現実世界のありとあら
ゆる魅力じみた魅力を装ったものでした。

マタイの福音書4：1－11（パワポ）

「何だかんだ言っても、美味しいものをお腹いっぱい食べることこそ、人
にとっての幸せだよ。

ほら、権力って魅力的でしょ！

ほら、お金があればなんだって出来るじゃん！

ほら、空を飛べるとか、宇宙に行けるとかってロマンじゃない？ 人類の文
明の粋の極みを目の当たりにすることですよ！

こういうもの全部あなたにあげるから、この世界の王になりませんか？

この非現実世界のありとあらゆるものをあなたの思い通りに動かしてみませ
んか？ 支配してみませんか？」と、悪魔はイエス様に迫り、誘惑しました。

当然ながらイエス様は、そんなこの世という非現実世界のまやかしに全く引
きずられることなく、神の言葉という現実を、神がともにおられるという
現実を、神の御業という現実を、主なる神にのみ仕え、神にのみ仕えるという
自由を生きるという現実を宣言し、全うされました。

ヨハネの福音書8：31－32（パワポ）

イエス様が、「わたしの言葉にとどまるなら、あなたがたは本当にわたしの
弟子であり、真理を知り、わたしという真理が現実が、あなたがたを自由にし
ます」と仰っている通り、イエス様が事実であり、現実であり、真理です。

イエス様にとどまりながら生きることこそが、現実を生きることです。

この世の何かが有りそうで何もない空虚なファンタジーな非現実的価値観と
いう不自由さを見透かし、その価値観に引き戻そうとする流れから私たちを守
ってくれます。 イエス様という現実を生きるならばです。

悪魔が画策するこの非現実世界に惹かれやすい私たちのことを思って、イエ
ス様は十字架に架かれる最後の時まで、私たちのために祈って下さいました。

ヨハネの福音書17：16－19（パワポ）

「イエス・キリストを信じるクリスチャンたちが、この世という非現実世界
で、現実であるイエス・キリストを証しする生き方をする時、どうか彼らがミ
イラ取りがミイラになるように、この世という非現実世界に丸め込まれるよう
なことがないように、彼らをお守りください。

イエスというリアルにとどまり続けることが出来るようお導きください。

彼らが、この世という非現実世界にあって、神の国という現実世界を生きられるよう聖別して下さい」と、イエス様祈って下さいました。

Conclusion

私は、主イエス様を知り信じる前までは、「ドラえもんがいたらいいなあ」とか、「願いを叶えてくれるドラゴンボールやアラジンの魔法のランプが欲しいなあ」と、漫画の世界と現実をごちゃ混ぜにしながら、目の前にある問題をしっかりと見据えることが出来なかったように思います。

目の前にある現実問題を避けて通りたい、無きものにしたい、無いものと考えたいと思いながら、目の前にある問題を正面切って見据えながら、そこにある意義や意味を見出すことが出来なかったように思います。

もっと言いますと、結局のところ、死という現実を前に無力感を覚えていたように思います。

ところが、イエス様を知ると、目の前にある問題の中に神の御手を、神のご計画を、神の導きという現実を見出すことが出来るようになりました。

もうこれ以上、目の前にあることのために、ドラえもんやドラゴンボールや魔法のランプなどのファンタジーに心馳せることはなく、現実であられる神に、真実で事実で真理であられるイエス様に祈り、訴え、期待することが出来るようになりました。

その問題の中に、死をもって何もかもなくなってしまう空虚ではなく、神にある意味や意義や宝を見出す、見出そうとするようになれました。

モーセやヨセフやダビデのような信仰者たちは、目の前にある問題に対してこの世という非現実世界的解決を試みる代わりに、神という現実なるお方に頼り希望を置きながら、その問題の中に神という現実なるお方を見出していきました。

イエス様もそうです。

「父よ。出来ることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい」と祈られたほどの苦しみという問題を、この世への逃避という非現実的解決ではなく、神の御旨御言葉に従って死なれるという神にある現実を全うされて、神の栄光へと入られました。

すみません。私の言葉足らずな説明のため、分かりにくい少しややこしい話になってしまいましたが、主イエスを知り信じることこそ、現実を生きることです。

現実を知っているということです。

ἀλήθεια アレセイアという真理、現実、事実は、主イエス・キリストにあります。

私たちが聞き、教えられているイエス様は真理です。

お祈りいたします。 祝祷：真理はイエスにあるのですから。